

# 司令長官の孤独 (三)

山田 遼

〈6〉

昭和十六年十月十六日の昼過ぎ、東京・霞ヶ関官庁街の海軍司令部に、第一航空艦隊の草鹿参謀長が姿を見せた。

霞ヶ関の中央にあつて、通称「赤レンガ」と呼ばれている三階建てのこの建物は、明治二十七年、ジョサイア・コンドルの設計で竣工したもので、一階と二階を海軍省が、三階は軍令部が使用していた。

草鹿が足早に階段を昇り、三階に到達すると、連絡を受けていたらしく、航空作戦担当の三代辰吉中佐が待ち受けていた。

「お待ちしていました」

「ああ、部長も課長も在室だろうか」

## 《前号までのあらすじ》

昭和十六年十月、対米英の開戦に向けて、歴史の歯車は確実に回り始めていた。

いまは絶対に戦うべきでないという信念の持主の、連合艦隊司令長官山本五十六は、その一方では開戦へ向けて、着々と準備を進めるべき立場に置かれていた。その時に山本が選択した対米戦略は、これまでの伝統的な邀撃作戦とはまったく違つた、開戦時のハワイ攻撃計画だった。

当然、軍令部や実施部隊から猛反対の声が上がつたが、山本は意に介することなく、あらゆる反対を押しつけて計画の実現に邁進していた。

「先ほどから、作戦室で協議をされています」

「そうか、作戦室だな」

草鹿は昭和十三年から約一年半、この軍令部で第一部の第一課長を務めているので、部内の様子はよくわかつている。案内されるまでもなく、三代中佐の先を歩いて作戦室の扉を開いた。

広い室内の中央に、畳三枚分ほどの大きな机が据えられていて、その上には太平洋全図とおぼしい地図が拡げられてい

る。

机の右側に立ったまま、地図を覗きこんでいた二人が、こちらを振り向いた。

福留<sup>ふくるとま</sup>第一部長と富永作戦課長である。

「おお、待っていたぞ。まあそちらに掛けてくれ」

福留が机の向かい側をさしたので、草鹿は対面する左側の椅子に腰を下ろした。後から入ってきた三代中佐は廊下側に、福留と富永はそのまま並んで着席した。

部屋の奥は一面のガラス窓で、秋の日差しを一杯に浴びた国会議事堂が聳えていた。

福留たちの背後の壁は、すべて造りつけの書棚になっていて、ぶ厚い書類綴りがびっしりと並んでいる。草鹿の後方の壁の前には、キャスターつきの黒板が置かれているが、何も記されていないかった。

「本日の要件は、一航艦としての要望だそうだが、まず聞かせて貰おうか」

福留部長は、かなり打ちとけた口調で切り出した。

「では、率直に申し上げます」

前置きをして草鹿は語り出した。

「ハワイ攻撃の実施に当たって、当司令部が現状、最も必要としているのは、第一には給油艦の増強、その次には正規空母六隻の充当です」

草鹿は念を押すように、ゆっくりと述べた。

対向する福留と富永は、そのあたりは充分予期していた様子で、軽くうなずきながら聞いている。

「何しろ目標は、米國太平洋艦隊の全兵力と世界最大級の真珠湾軍港です。この強大な戦力と真向から激突するとなれば、いかなる事態に遭遇するか、まったく予断を許しません。当然、母艦兵力は正規空母六隻のすべてが必要ですよ」

草鹿は持ち前の押しの強さで、音吐朗々と主張した。

「うむ」

聞き終えた福留は、草鹿の言葉を軽く受けとめる形で答えた。

「給油艦の件だが、現状の五隻から、余裕をみて二隻増強の七隻とする案は認めよう。しかしながら、正規空母六隻は無理だ。南方作戦には、どうしても二隻をふり向けねばならない。従ってハワイ攻撃は、予定通りに四隻で実施して貰いたい」

口調は穏やかだが、福留は明確に言い切った。

「しかし部長、こちらも随分と検討を重ねましたが、四隻ではとても成算が立ちません」

草鹿も語調を強めて反論する。

「どいつて、今となっては中止するわけにはいきまい。結局のところ、いかにして奇襲を成功させるかだな」

福留の言葉に、草鹿は大きくうなずいた。

「その通りです。完璧な奇襲が成功するという保証があるなら、まったく問題はありせんよ」

草鹿の言葉で、室内の緊張は次第にほぐれてきた。

「つまり奇襲が成功すれば、空母は四隻で足りる。だがもし強襲となったら、六隻でもまだ不十分なわけだな」

部長の福留の言葉が終わると、隣の席の富永作戦課長が口を開いた。

「空母二隻の南方転用について、少し説明させて頂きます」  
端正な風貌のこの作戦参謀は、明晰な口調で述べた。

「これまでは空母の必要性は、主としてフィリピン攻略のためと認識されてきました」

彼はそこで言葉を切って、さらに続けた。

「しかし開戦当初のルソン島航空撃滅作戦に関しては、第一航艦の独力でなしとげられる見通しが立っています。それよりも問題はシンガポールです」

富永は机の上の地図に視線を向けながら言った。

「ご存知のように、シンガポールの防衛は、マレー半島側から侵攻してくる敵軍を、少なくとも二カ月間は持ちこたえる。その間に、英本土から強力な艦隊が救援にかけつけるといのが基本戦略でした。ところが先日、我々の入手した情報によれば、英国政府は開戦に先立って、すでに艦隊の派遣を決

定した模様です」

富永は平静に語り続けている。

「なに、それは本当か。で、その艦隊の兵力は」

草鹿は少しせきこんで尋ねた。

「まだ確実とは言えませんが、新型戦艦二隻、正規空母一隻という陣容ではないかと推定しています」

富永の伝えたのは、衝撃的な内容だった。

「うーむ、新型戦艦ならキング・ジョージ五世クラスだが、もしそれが本当なら、彼我の戦力バランスがまったく崩れてしまうぞ」

草鹿の言葉を福留が受けた。

「その通りだ。現在我が方の南方部隊に配属されている戦艦は、金剛こんごう・榛名はるなの二隻だが、向こうのキング・ジョージクラスにはとても太刀打ち出来ない。幸い相手の空母は一隻のようだから、こちらとしては正規空母二隻の投入が、ぜひとも必要になってきたんだ」

福留の言葉には、十分な説得力があった。

「しかし英国も随分と思いついたものだ。今年の五月、ドイツのビスマルクが大西洋に出撃した時には、邀撃したフツドが轟沈され、プリンス・オブ・ウェールズが損傷するという有様だった。ビスマルクはその後、何とか沈めたが、もう一隻、同型艦のテルピッツが残っている。それに備えて、英

本国艦隊は常時警戒態勢だというが、よく二隻もこちらへふり向けたものだなあ」

草鹿はまだ半信半疑だった。

「いや、これだけの手を打てば、日本はシンガポール攻撃をあきらめるだろう。つまり抑止力として、充分の効果があると考えているらしいんだ」

福留の言葉に、草鹿もうなずいていた。

「それで敵艦隊の到着時期は」

「そのあたりは不明です。おそらく一ヶ月ほど後と見ていますが」

富永の答えに草鹿は首を傾げた。

「ひよつとすると、口先だけのゼスチュアじゃないのか」

「ところが、司令長官には軍令部次長のトーマス・フィリップスが内定したという情報も入っている。やはり奴らは本気で動き出しているらしいぞ」

福留の言葉で、草鹿も納得せざるを得なかった。

「こうなると、空母二隻は思い切るしかないようだな」

草鹿が言うと、福留は身を乗り出した。

「わかってくれたか」

「ああ、俺も二年前には、ここで作戦課長をやっていたんだ。あんたたちの立場はよくわかるよ。だから艦隊へ戻って、軍令部は頑として方針を変えませぬ。ハワイ攻撃は空母四隻で

やるしかありませんと言えはそれで済む。しかしGF司令部の方は、それで納得するだろうか」

草鹿の言葉に、福留と富永は顔を見合わせた。

「もちろんこのあとには、GFから参謀長か首席参謀が来られるでしょう。しかしながら理論的に我々の主張を覆すことは出来ないと思います。こちらが一步も引かずつばねたら、あるいは山本長官もハワイ攻撃を撤回されるかも知れませんが」

さすがの富永も、かなり高揚した口調で述べていた。

「うーむ、撤回はされまい。結局ハワイは四隻だけでやることになると思うが」

草鹿の言葉を福留が引き取った。

「まあそのあたりが、妥当な線だが、どうだ。もしそうなった時、一航艦はどういう戦をするつもりだ」

「そうだなあ、航空兵力が2 / 3 になるからな。打っ手はどうしても限られてくる。奇襲なら問題はないが、強襲となると、それこそ一撃離脱に徹するしかあるまい」

草鹿が言うと、かぶせるように福留が続けた。

「さあ、そこだよ。何しろ一航艦の空母六隻は、かけがえのない虎の子だ。来るべき米英との艦隊決戦に備えて、何としても温存したい。だから戦果の方はどうでもいい。決して深入りせず、最小限の損失で戻ってきてほしいんだ」

軍令部第一部長の福留は、昭和十年には第一課長を務めている。つまり福留も草鹿も、そして現職の富永も、海軍軍令部の中心であり作戦立案の責任者である第一部の第一課長、いわゆる作戦課長の経験者だった。

しばしの間沈黙が続き、それを破ったのは三代航空参謀だった。

「南方部隊に空母二隻をふり向けるとして、果たしてそれで足りるでしょうか」

「という」と

「つまり兵力比です。我が方の主力艦、金剛と榛名は、改装を重ねていますが、いずれも大正年間に建造の旧式艦です。

一方、相手がキング・ジョージ五世型二隻とすれば、これは今年完成したばかりの最新鋭で、主砲の威力からしても、圧倒的に当方が不利です。そこへ、こちらの空母二隻、多分五航戦の瑞鶴、翔鶴を加え、向こうにインドミタブル型一隻を加えると、ほぼ勢力が均衡します。しかし、マレー半島上陸の輸送船団を抱えている分だけ、我が方のハンディが大きいと見るべきです」

三代中佐は、彼我が戦力を入念に数え上げていた。

「要するに、空母二隻では足りないというのか」

草鹿が尋ねた。

「そうです。決して充分とは言えません」

「しかし空母艦載機は、こちらが一四〇機で向こうはほぼ五〇機、三対一の比率だぞ」

草鹿が反論すると、三代は言う。

「たしかに機数は三倍です。ですが相手は、最初から戦闘機を多く搭載して、上空の防衛に徹するだろうと思います。そうなれば、戦闘機の数はほぼ同数です」

「うーむ、そういう観点もあるな」

その時、富永が口を開いた。

「もちろん我が方には、七隻の重巡を初めとする強力な水雷戦隊があります。ですから夜戦にでも持ちこめれば、随分有利になります。ただ気象条件など変動要因があつて、なかなか確信が持てません」

富永は冷静に指摘している。

「では何だ、柱島泊地に鎮座する長門ながと、陸奥むつの主力部隊に、出動して貰ったらどうだ」

草鹿が言う。福留が答えた。

「そりや無理だ。G F司令部は長門に將旗を掲げて、作戦全般を統括している。そう簡単に第一線に出るわけにはいかんよ」

福留は無造作に否定していた。

「となれば結論は明らかだ。直ちにハワイ攻撃を中止して、一航艦の空母六隻を全部南方へふり向けるといふんだな」

草鹿は言いながら、一座を見渡した。

広い机を囲んだ三人の軍令部員たちは、それぞれにうなずいている。ややあつて福留が言った。

「その通りだ。英国艦隊の兵力増強は、まだ確定したとは言えない。多少の増減はあるだろう。しかしながら向こうが思い切った手を打ってくれば、当然、こちらもそれなりの対応が必要になる。もし緒戦ちよせんにおいて、マレー上陸作戦が失敗したら、我が軍の南方作戦は大きく躓つまずくことになるんだ」

福留の言葉は、まことにもつともだった。

草鹿からすれば、永年練り上げてきた基本戦略を覆すようなハワイ攻撃案は、結局のところ有害無益だという軍令部の主張は、よく理解出来た。

自分がもし、第一部長あるいは一課長の立場であれば、当然、同じことを言うだろう。ところが現状は、その異端の戦法をゴリ押しする推進役を務めている。何とも皮肉な話だな……。

草鹿が自嘲気味でいるのに対し、軍令部員たちは、あくまで真剣な面持ちだった。

「参謀長。あなたは戻ったらG F司令部に、空母六隻使用の件は、軍令部がきっぱり断わつたと報告してほしい。この次は、G Fの参謀長が首席参謀か、あるいは二人同時に乗りこんでくるだろう。まあこのあたりが正念場だな」

福留は、やや改まった調子で告げた。

「承知しました。本日の経過は、ありのまま報告しましょう。それでウチの長官には何か伝言がありますか」

「そうだなあ。南雲さんには、軍令部は決していい加減な妥協はしません、と伝えて貰いたい」

「わかりました」

公式の折衝は、それで終了した。草鹿が席を立つと、福留部長はちよつと立ち寄ってくれと自室へ誘った。

第一部長の勤務室は、ゆつたりした広さで、衝立の奥には応接セットが置かれ、その向こうの窓側や大きなデスクの上には、書類がうず高く積み重ねられていた。

草鹿をソファーに坐らせ、向かい合つて腰を下ろした福留は、卓上の煙草セットから紙巻きを取つて火をつけた。

「なあ草鹿、お前は山本さんにもう反対しませんと、協力を誓つたそうだな」

福留は、草鹿より兵学校は一期上の四十期だが、海軍大学は共に二十四期の同期生なので、二人だけになると、自然に俺、お前の間柄になってしまう。

「そうだよ。山本さんに頼まれて、さすがの俺も断われなかつたよ。あれはまあ一種の人徳だろうが、そんなわけでこの件は表立った反対が出来ないんだ」

「ああ、それで結構だ。実戦部隊のスタッフだからな、命令

のままに動いて当然だよ。だがなあ草鹿、俺はなぜあの人が、これほどまでハワイにこだわるのか、今でも不思議で仕方がないんだ」

福留はそう言うと、煙草の煙をゆっくりと吐き出した。

「うむ、先日の反対陳情の時には、南方へ向けて出払っている時、もし本土を攻撃されたらどうするとか、状況が想定外の事態だから、あえて奇策を選んだとか口にはされていたが、俺はそれは、タテマエ論だと思って聞いていたよ」

「じゃ、ホンネは何だと思っ」

「いや、それがよくわからない。一時は、開戦を阻止するための手段かと思っていたが、ここまでくると違うようだ。じや、あんたはどう思っているのかね。今年の四月までは、G Fの参謀長をやっている、山本さんの身近にいたんじゃないか」

草鹿はそう言って問い返した。

「それがなあ、あの頃はまた、単なる研究課題だった。ここまでするとは、実のところ予想していなかったよ」

「では、山本さんの肚はらの中を何と見ている」

草鹿はさらに問い詰めた。福留は無言のまま、しばらく煙草をふかし続けていたが、やがて口を開いた。

「これはまったくの想像だから、そのつもりで聞いてくれ。知ってのようにあの人は博奕ばちが大好きだ。ポーカー、ブリッ

ジ、ルーレット、将棋と何でもこいで、なかなかの腕前だという。つまり天性、博奕打ちの素質を備えているわけだ」

福留はそのまま、煙草を手にしばらく考えこんでいたが、やがて続けた。

「いま現在、この切羽せつぱつまった状況で、どんな手を打つべきか、あの人は考え抜いた末に、奇想天外な結論に達した。つまりこれは、勝負師のカンがもたらしたまことに独創的な境地だと俺は思うんだ」

福留は、半ば独り言のように語った。

「なるほど、あんたの見方は一理があるよ。俺が大西と二人で反対陳情に行った時、一番強く感じたのは、山本さんが、この作戦は絶対に成功すると確信していることだった。一体どんな根拠があるのかと不思議に思ったが、それがつまり、勝負師の直感だということだな」

草鹿の言葉に、福留は大きくうなずいた。

「そうだよ、将棋でいえば、何十手も先を読んでいて、その盤面がありありと眼に浮かんでいるのだろう」

「じゃ、山本さんは、奇襲が必ず成功すると、読んでいるのだろうか」

「俺はそう思う」

福留は言い切った。

「もしそうならこの作戦は成功だ。空母は六隻もいらぬい。

四隻で充分だ。ところが山本さんは相変わらず六隻にこだわっているじゃないか」

「そういえばそうだな。じゃお前の解釈はどうなんだ」  
福留は問い返した。

「いや、俺もわからない。しかしあんたの視点をさらに進めると、奇襲はたしかに成功するが、そのあとで、どうしても空母六隻を必要とする何らかの事態が起きるといふことじゃないのかな」

二人が顔を見合わせたまま、会話はとぎれた。やがて福留が口を切った。

「いづれにせよ、これは一か八かの大博奕だ。もし失敗したら、空母戦力が壊滅するばかりか、戦の大勢そのものが決してしまふ」

「もちろん、我々は生還出来ないわけだ」

草鹿は口になっているが、それほどの深刻さは浮かんでいない。

「お前は、気にしていないのか」

「ああ、そうならもう、当事者の独断専行だからな。壊滅的な損害など受けず、うまく回避して見せるよ」

「まあ、口で言うのは簡単だが、実戦となると果たしてどうか」

「いや、ウチの長官は、航空作戦は素人だが、艦隊行動の指

揮となると。かけ値なしの一流だよ」

草鹿は胸を張って見せた。

「たしかにそうだ。だから極めつきの難コースである北方航路の航程については、こちらはさほど心配していない。ハワイまでは南雲さんが、うまく引っぱって行くだろう。だが、それからあとはお前の出番だぞ。何とかこの修羅場をかくぐつて、空母六隻を無事に連れ戻ってほしいんだ」

福留は真剣な口調で言った。

「うむ、わかった。まかせてくれ」

「成算はあるのか」

「そんなものはない。だが俺は、若い頃に無刀流に打ちこんだことがある。その時に会得したものは、相手の太刀筋を見切ることだった。つまり敵の攻撃を間一髪で受け流して、後の先を取る……まあこのあたりの呼吸が役に立つかも知れん」

草鹿が言うのと、福留はニヤリと笑った。

「お前の得意の禅問答だな。たしかに戦場にあつては、戦機とか勝機というタイミングをいかに把むかが、勝敗をわけける場合がある。そのあたりは大いに期待しているんだ。とにかく頼むよ」

軽く頭を下げる福留第一部長を眼前にしながら、草鹿は陸奥の上甲板で山本長官が告げた、どうか僕の信念の実現のために協力してほしいという言葉を、思い起こしていた。



あの信念という言葉には、大変な重さと内容がこもっていた。この作戦の成否には、日本の命運がかかっている。万難を排して遂行しなければならぬ。もし出来れば、自分が直接、艦隊を率いてハワイへ乗りこみたいという意気込みさえ感じ取られたのである。

なぜ、あれほどの強烈な確信が生まれたのだろうか。とても勝負師のカンだけでは片づけられない。あの時、立ち合っていた人々が何と感じたかわからないが、少なくとも語りかけられた本人は、名状し難い気魄に打たれたことは確かだった。必ず長官のお考えの実現に努めます——と答えたが、その時点では、そう答えるのが当然だと思っていたのである。そしていま、こうして軍令部第一部長からも頼むぞと頭を下げられている。もうこうなつては、確信や成算があるとなかろうと、ただ前進あるのみだった。

「かい潜る、刃の下は地獄なり、だからな」

「何だそれは」

福留が尋ねた。

「剣法の極意を和歌にしたものだよ。そのあとには、身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ、と続くんだ」

「なるほど、虎穴に入らずんば、虎子を得ずということだな」

「まあ、そういうことだ」

顔を合わせた福留と草鹿は、互いに呼応するものを強く

感じていた。

それから三日後の十月十九日、軍令部に姿を見せたのは、連合艦隊首席参謀の黒島亀人大佐だった。

場所は同じ作戦室で、相対する顔ぶれもこの前と同様の、福留、富永、三代の三名である。

先ほどから使用する空母の数について、押し問答が続いていた。正規空母六隻を要求するGF司令部に対し、軍令部はあくまで四隻までと主張している。

「では、軍令部は六隻全部の使用を、どうしても認めないというのですな」

机を隔てて、黒島大佐の左側に福留部長、正面には富永課長、三代参謀が着席している。黒島は三人を見回しながら念を押した。

「そうです。くり返して言いますが、シンガポールの英国艦隊増強で、状況が大きく変わりました。マレー上陸作戦の遂行には、空母二隻がどうしても必要です」

富永は冷静な口調で言う。

「しかし英軍の強化の内容は、まだ判然としない。軍令部は戦艦二隻に空母一隻だと推定されているが、我々は空母の増派はないと見ています。そうであれば当然状況は変わってくる」

黒島は重い口調でゆっくり語っていた。

「ですから、まず最悪の状況を想定すべきでしょう」

「いや、作戦の指向は多岐にわたり、戦力にほとんど余裕がない。だから増派が戦艦二隻であれば、基地航空兵力を二隊増強する。もし空母一隻が加わったら、フリリッピン方面に予定している龍驤をふり向けます」

黒島と富永の意見は、真向から対立していた。英海軍の正規空母は搭載機数が少ないので、我が方の小型空母龍驤にはほぼ匹敵する。だから陸上攻撃機隊の直衛が果たせるというのが、黒島の主張だった。

その時、福留部長が発言した。

「GF司令部の判断は、航空戦力をやや過大に評価しているように思われる。果たして陸上攻撃機の二隊と小型空母一隻の増派で足りるだろうか、はなはだ疑問ですな」

部長の言葉に富永も続けた。

「そうです。戦艦に対応するには、やはり戦艦が必要です。わが方の金剛クラス二隻ではとても太刀打ち出来きません。となれば主力部隊の長門・陸奥に向いて貰う必要があります」

「いや、それはダメです。長門以下の戦艦六隻はGF長官が直率して、開戦当初、小笠原列島の線に出勤します。もしもハワイ攻撃部隊が苦境に陥った場合には、その救出に進出す

る予定です」

黒崎はかなり強い調子で言い切った。

そのまま室内では沈黙が続いた。どちらも自説を主張して譲ろうとはしない。討議は全くの膠着状態に陥っていた。

やがて福留が口を開いた。

「どうだろう。少し休んでひと息入れたら、議論はそれからにしよう」

部長の提案で、一同はしばらく休憩に入ることになった。

焙じ茶の大ぶりの湯呑みが運ばれ、それぞれ坐り直した時、黒島が伊藤次長に挨拶したいと言いつ出した。

「次長は公室におられます。ご案内しましょう」

三代参謀が黒島を伴い、部屋の外へ出た。

「しかし、GFの方もよく粘るなあ」

湯呑みをすすりながら、福留が言った。

「いや部長、大丈夫です。こちらがあくまで突っぱねれば、戻ってありのまま報告するしかありません。そのうちに南雲さんの方から、四隻でもかまわないと意見具申があり、結局、その線で落ちつくと思います」

富永は自信ありげに述べた。

「だがなあ、作戦というものは、軍令部が立案してGFが実施するのが大原則じゃないか。それがこの有様だ」

福留は嘆息しながら続けた。

「日露戦役の開戦に当たり、新たに編成された連合艦隊の司令長官に東郷さんが抜擢された。誰しも驚いたが、怒ったのは当然自分が選ばれると思っていた、常備艦隊長官の日高壯之丞だ。すぐさま海軍大臣の山本権兵衛のところへ怒鳴りこんだ。なんでも短刀をつきつけて、納得出来なきや貴様を刺して俺も腹を切るとまで言ったそうだ。何しろあの二人は、海兵第二期の同期生だからな。ところが山本海相は少しも騒がずに、お前のそういう態度が問題なんだ。いざ開戦となれば、お前は独断専行して、なかなか軍令部の指示に従わないだろう。一方、東郷は上からの命令には絶対に忠実だ。だから俺は東郷を選んだと告げたという。それを聞いてすぐさま納得した日高も、なかなかの人物だと思うよ」

福留は珍しく饒舌に話し続けていた。

「部長の言われる通りです。指揮系統を乱すような行動は許すべきではありません。ここは軍令部として、あくまでスジを通す必要があります」

二人がそのように話し合っている時、同じ階の次長公室では、伊藤整一軍令部次長と黒島GF参謀の間で、切迫した会話が交わされていた。

「山本さんは本当にそう言われたのか」

「絶対、間違いありません」

「うーむ」

長身で謹厳な風貌の伊藤次長は、今年の四月から八月まで、連合艦隊の参謀長を務め、黒島の直属上司という間柄だった。それだけに、いま黒島の口から山本長官の伝言を聞いて驚きの声を上げたのである。

「もう一度申します。山本長官は、ハワイ攻撃において空母六隻の使用が認められないならば、GF長官を辞任すると言われました」

「……………」

伊藤は瞑目したまま考えこんでいたが、やがて目を開いて立ち上がった。

「それでは、これから総長にお伝えして協議するから、このまま待っていてくれ」

伊藤は言い捨てて、部屋を出て行った。

五分、十分と時間は経過するが、次長はなかなか戻って来なかった。

とうとう切り札を出したが、果たして軍令部は呑むだろうか――。黒島にはそれなりの成算があつたが、もしやという不安もあつた。

万一こちらの要求が通らなければ、長官は辞任され、ハワイ攻撃も中止されるだろう。これまで積み重ねてきた努力は、すべて水の泡だが、そうしなければならぬ。これも運命だな――。黒島の胸中には、さまざまな想いが去来していた。

十五分ほど過ぎて、突然、ドアが開いた。

入ってきたのは軍令部総長の永野修身ながののおさみ大将である。その後方には伊藤次長と福留部長がつき従っている。

やはり長身で禿げ上がった温厚な容貌の永野総長は、ツカツカと歩を進め、立ち上がって迎える黒島の前に立った。

「GF司令部の申し入れを検討しました。山本長官がそれほどまでに自信があるというのならば、総長としては希望通りに実行するよう取りはからいます」

永野はゆつたりした口調でもって、そのように告げた。

「ご配慮、まことに有難うございます」

黒島は深々と頭を下げた。

永野総長の笑みを含んだまことに温和な態度にひきかえ、その後方に従う伊藤と福留は、まるで凍りついたような表情で、凝然と立ち尽くしていた。

## 〈7〉

十一月八日夜更け、新橋の料亭「菅の家」すがのやの奥座敷に、堀悌吉が姿を見せた。

堀は山本五十六と同期で、無二の親友だったが、昭和九年に海軍部内の権力抗争に巻きこまれ、中将で第一戦隊司令官の時に現役から予備役に移され、いまは丸の内に本社がある日本飛行機株式会社の社長を務めている。

「菅の家」の離れ座敷は次の間つきの八畳で、瀟洒しょうしやな数寄屋造りだった。

十一月に入りやや肌寒い日が続いているが、時刻は午後八時半を過ぎていて、奥庭に面した雨戸は閉ざされていた。

太い眉に穏やかな表情で濃いグレーの背広姿の堀が、大ぶりの座布団に腰を据えると、床の間の軸が目に入った。

百戦百勝非善之善者也　不戦而屈人之兵善之善者也

二行の文字が闊達な筆遣いで記され、海軍大将　島村速雄はやおと署名されていた

たしかに島村さんらしい、こだわりのない伸びやかな書体だな……と思つて眺めていると、するすると入口の襖が開いた。

すつと入りこんだのは、髪を銀杏返しいちやうがえに結び、濃い紫地の着物に裾を引いた芸者衆だった。

「あら、堀さん、お久しぶり」

「ああ、梅龍うめりゆうか、相変わらず元氣そうだな」

「山本さんは、ご一緒じゃなかったの」

「ここで八時半という約束なんだが、あいつは忙しいからな」堀が正面におかれた座布団に目をやりながら言うと、梅龍はそのまま近づいて堀の傍らに坐った。額がやや広く目許の

涼しい華やいだ顔立ちである。

「ねえ、堀さんは今度、会社を移られるそうね」

彼女は軽く小首を傾けて尋ねた。

「そうだよ。浦賀ドックの社長の寺島さんが、逋信大臣で入閣したので、その後任をやらないかということなんだ」

話題の主の寺島健は、堀たちの一期上の三十一期で、連合艦隊參謀長や海軍省の軍務局長を歴任した逸材だったが、いわゆる條約派と艦隊派の抗争に關与して、昭和九年に海軍中將で予備役へ編入され、以来浦賀ドックの社長を務めていた。

「浦賀ドックって、お船を造ってるんでしょ」

「そうだよ。飛行機製造から造船業に転向だ」

「もう決まったんですか」

「うむ、十二月からそっちへ移るつもりだよ」

話し合っているところへ、黒塗りの膳部が運ばれ、堀の前と向かい側に置かれた。

「さ、どうぞ」

銚子を手には梅龍が勧める。

「私は、呑まないよ」

「知ってます。私が頂きます」

注がれた盃をそのまま膳の上に置くと、梅龍が取り上げて一気に飲み干した。

「ああ、おいしい」

「いつ見ても、見事な飲みっぷりだな」

彼女が差し出す盃に注ぎ足してやりながら、堀が言う。

注がれるまま、三杯ほど呷ってから、彼女は盃を置いた。ほんのりと目許がうるんできたのが、まことになまめかしい。

「なあ梅龍、山本とは相変わらさずか」

「ええ、熱熱のままよ」

当然のように彼女は答えた。

「もう何年になる」

「そうねえ、七年ほどになるかしら。早いものね」

そこまで言つて、さすがに少し気がひけたのか、彼女は話題を変えた。

「ねえ堀さん、床の間の掛軸、あれは何と読むんですか」

「ああ、あれか」

堀は軸へ視線を向けた。

「あれはね。百戦百勝は善の善なる者に非ず、戦わずして人の兵を屈するは善の善なる者なりと読むんだ」

「何だか。よくわからないけど」

「つまり、戦つて勝ち続けるのが、決して最善ではない。戦わずに敵兵を屈服させるのが、最も秀れているというわけだよ。これは支那の古い兵法書『孫子』の謀攻篇にある言葉だ」

堀が説明すると、梅龍が言った。  
「たしかにそうね。散々お金を使つて芸者衆を口説き落とす

よりも、黙っていても女の方から靡なびいてくるのが上だということね」

彼女はいかにも花柳界らしい受けとめ方をして見せた。

「うーむ。そういう解釈もあるな。いうなれば、旦那だんなより情人の方が上というわけだ。さしずめ山本は、あんたの間夫まぶということになるのか」

「おっしゃる通りよ。旦那は旦那でちゃんといえますからね」

梅龍は婉然えんぜんと微笑んでいた。

その時、部屋の外から梅龍姐さんと声がかかった。襖を開いて二言、三言やりとりがあつて、梅龍はふり向いた。

「表のお座敷へ顔を出してほしいと言うの。ちよつと行つてきます」

彼女が立ち去ると、残つて堀は想いに耽たづなつていた。

床の間の「戦わずして人の兵を屈するは、善の善なるものなり」という言葉は、まことに含蓄かんじやくのある言葉だった。

いままさに米、英、蘭の三国と戦争状態に入らうとしている我が国の現状は、存亡の危機に直面しているというしかな

い。

日本海軍の良識派ともいふべき、谷口尚眞たにぐち なおみ、山梨勝之進やまなし かつのしん、寺島健、堀悌吉と連なる系譜は、条約派とも呼ばれていたが、軍備の縮小を巡つて、軍令部の加藤寛治かとう ひろはるや末次信正すえつぎ のぶまさなど、いわゆる艦隊派や、さらにその後ろ楯の東郷平八郎元帥や伏見

宮博泰親王らと激しく対立していた。その結果、条約派のほとんどが予備役へ編入され、海軍を追われていたのである。

堀にして見れば、日本海軍の軍備は、仮想敵国の米海軍を打倒するためのものではなく、あくまで戦争を起こさせないための、抑止力として存在すべきものだった。

孫子の言う、戦わずして人の兵を屈するというのも、戦争を未然に防止するという観点で受けとめていたのである。

しかしながら堀たちの望みは空しく、事態は刻々と開戦へ向かつてつき進んでいる。皮肉なことに志を同じくしていた山本五十六が、実戦部隊の最高指揮官として、日夜、戦闘態勢の確立に奔走しているのだった。

一ヶ月ほど前、十月十一日付で山本から届いた手紙には、「個人としての意見と正反対の決意を固め、その方向に一途いつと邁進まいしんのほかなき現在の立場は、まことに変なものなり、これも命いのちというものか」と記されていたのである。

「待たせて済まなかつたな」

がらりと襖を開けて入ってきた山本五十六は、堀に声をかけるとそのまま向かい側の席に腰を下ろした。丸刈りの顔面には精気が漲もたっていて、海軍大将の襟章をつけた軍装のままである。

「どうだ」

堀が言う。

「うむ」

山本はそのまま腕を組んでしばらく瞑目していたが、やがて目を開いた。

「来るころまで来てしまったな。十月十八日に東條内閣に替わった時が、最後のチャンスだった」

山本の口調は、重く沈んでいる。

「東久邇宮<sup>ひがしのみや</sup>さんを押す動きもあつたそうだが」

「ああ、もし実現していれば、違つた展開があつたかも知れん。しかし木戸内大臣が、東條を強く勧めた。つまり毒をもつて毒を制すというやつさ」

「だが、その東條も陸軍を押さえることは出来なかつたわけだ」

堀の言葉のあとは、重い沈黙の時が流れた。

「それでいつまでこちらにいるんだ」

「十一日には呉へ戻るよ。その間は作戦計画の発令や、陸軍との協定で忙しい」

山本は言つてから、一呼吸おいて続けた。

「なあ堀、この現状をお前は どう見ている」

直視した山本の視線を受けとめて、堀はゆっくりと答えた。

「もうこうなれば、死中に活を見つけ出すしかあるまい。私は現役を離れてかなりたつから、部内のことはよくわからん

が、何か方法があるはずだ」

「それじゃ、もしお前が俺の立場ならどうする。あのまま現役でいたら、お前はいまごろ海軍大臣かGF長官のはずだ」

山本はなおも追求した。

「そうだな。これでも飛行機製造の一端を担っているからな。最近の航空兵力の目ざましい向上はよくわかっている。もう大艦巨砲の時代じゃない。海戦の主役は間違いなく飛行機だ」

堀が言い切つて山本が大きくうなずいた時、襖が開き仲居さんが顔を見せた。

「そろそろ梅龍姐さんをお呼びしましょうか」

「いや、まだ話が終わっていない。このまま二人だけにしておいてくれ。酒も奇麗どころもそのあとだ」

山本が断わり、再び対話が続けられた。

「なあ堀、戦争を終結する手がかりは、どこにあると思う」

尋ねられて堀は考えこんだが、やがて顔を上げた。

「アメリカもイギリスも決して全能ではない。それぞれが弱点を持つている。アメリカの場合は、気まぐれな世論の動向が足枷<sup>あしづか</sup>だ。またイギリスは、広く分散した植民地との海上交路が弱点だと思う」

「うむ、それで」

「イギリスの場合は、香港、マレー、シンガポールなどの東

亜の拠点を失つても、何とか耐えられるだろうが、インドを

失うとなると、屋台骨が崩れるだろう」

「しかし、インド全域の征服など、とても無理な話だ」

山本が言うとは堀は微笑を浮かべ、これまでと同じゆったりした口調で言った。

「何も占領する必要はないんだ。まずインド洋を征圧して、セイロン島を占領する。つまり英本土との交通路を完全に遮断してしまう。このあたりまでは充分実現可能なはずだ。それからインド独立運動に火をつけ、あおり立てれば、イギリスの支配力は意外にもろく崩壊するだろうよ」

「だがそれは、陸軍を説得するのが難しいな」

「たしかに陸軍は、南方の資源地帯を占領すれば、兵力を満州に戻し、対ソ作戦に備えるつもりらしい。だがな、インドが脱落すれば、唯一の補給路であるビルマ・ルートが閉ざされ、重慶の蒋介石政権は干上がってしまう。つまり支那事変の全面解決につながるんだ。この辺に、陸軍と協調するいとぐちがあると思うんだが」

堀の戦略論は尽きるところを知らない。とうとう山本が笑い声を上げた。

「いやこれは驚きだ。戦争反対のお前の口から、これほどど宇宙壮大な戦略を聞かされるとはな。まるで、諸葛孔明よしかつこうめいから天下三分の大計を説き聞かされる、劉備玄徳りゅうびけんとくといふところだな」

「それはあんたも同じだろう。もうここまでくれば、何と少しでも生き延びる道を見つけ出すしかない。さもなければ、我が大和民族は破滅だからな」

堀は相変わらず物静かに述べている。

「うーむ、それでは米国に対する方策はどうだ」

山本が続けて尋ねた。

「言うまでもない。太平洋の制海権を、どちらが握るかだ。日露戦争では、ロシヤの旅順艦隊を撃破し、次いで来攻してくるバルチック艦隊をほとんど全滅させた。アメリカが相手なら、まず太平洋艦隊その次に大西洋艦隊を、各個に撃滅することだよ」

堀は事もなげに言い切った。

「そう簡単に言うな。どちらも我が連合艦隊に匹敵する大勢力だよ」

「だから、そこがあんた方の腕の見せどころじゃないか。かつては対米戦力比が六割じゃ承知出来ない。何としても七割だと軍令部側が言い張って、海軍が真二つに割れる有様だった。ところが現在の対米戦力比は、七割五分まで上がっているらしい。何とか打つ手はあるはずだ」

堀の言葉に山本はうなずいた。

「お前の言う通りだ。しかし日露戦役と同じように一年半で片をつけようとすれば、こちらから攻撃に出て、決戦に継ぐ



決戦を強要するしかない。だがこれは、一度でも躓いたら  
收拾しゅうじがつかなくなる。つまりよほどの運に恵まれないと成  
立た立たないということだよ」

山本の言葉には沈痛な響きがあった。

「それじゃ結局は、天命を待つばかりじゃないか」

堀の言葉に山本はすぐには答えなかった。ややあって彼は  
口を切った。

「問題は人だよ。適材が適所にいるかどうかが決め手になる」  
そう言うと山本は背筋を伸ばし胡坐したまま考えこんだ。

とんでもない難題が、この男の肩にのしかかっている……。

想いに沈む山本を見ながら堀は思った。

もはや開戦は避けられない。これは眼前につきつけられた  
厳然たる事実だった。ではどうしてこの危機を切り抜けるの  
か、果たして起死回生の方策はあるのか……。八月の米、英、  
蘭三国の経済封鎖で、石油の輸入は完全に停まった。これま  
で苦心して溜めこんだ備蓄は刻一刻と減少して行く。だから  
まず南方の資源地帯、ことにスマトラ、ボルネオの油田を占  
領して石油を獲得するのが、最優先の課題だった。我が方の  
戦力からすれば、それは比較的容易に達成されるだろう。し  
かし問題はその後だった。

いかにしてこの戦争を終結させるのか、一体終戦のいどぐ  
ちはどこにあるのか。政府や陸海軍の首脳は、何の確信も対

応策も持っていない。

陸軍はドイツの軍事力に幻惑されていて、いずれソ連は屈  
服し、英本土の占領も実現するだろう。そうなれば米国は戦  
う意欲を失うに違いないと、まことに安易に思いこんでいる。  
一方、海軍も軍令部あたりでは、東南アジアを占領して石油  
を手に入れたら、まずはひと安心という雰囲気らしい。あと  
は長期不敗の態勢を、なんとか維持出来ると考えている様子  
だった。

それにひきかえ、目の前の山本はまったく違う。この男は、  
ドイツの勝利も長期不敗の態勢も、まったく念頭にない。何  
としても自分たちの力でもって、早期終結にこぎつけるしか  
生き延びる道はないと、心に決めていたのだった。

「大正十一年のワシントン条約、昭和五年のロンドン条約で、  
世界の海軍の軍備拡大に歯止めがかかった。対米英、五・五・  
三の戦力比率は、わが国に見れば、むしろ好都合な設定  
だったじゃないか」

目を開いた山本が語り出した。気をとり直したような、明  
るい口調である。

「そうだよ、海軍の軍縮協定は、当分の間続くと思っていた。  
ところがナチス・ドイツの暴走で、再び各国の軍備拡大が始  
まり、とうとう第二次大戦が起きてしまった。これはまったく  
予想外だったよ」

堀が受けて言った。

「その通りだ。いまは絶対に戦うべき時ではない。日清戦争のあとの三国干渉と同じだ。何とか耐え忍ぶしかないと言いつづけてきたが、お前も同じ意見だったよな」

山本は堀の反応を見ながら、さらに続けた。

「だが俺の避戦論は、お前と少し違う。俺は航空戦力の急速な発展が、我が国に有利に作用すると見ているんだ」

山本は言葉を切り、少し考えてから言った。

「知つての通り、いま米国が始めたスタークの両洋艦隊建造計画、これが二年後に完成すると、我が方の対米比率は七割五分から約三割に転落する。とてもまともには戦えない、だから戦うならいまいかなというのが、石油備蓄の減少と共に主戦論者の言い分なんだ。しかしこれは、いわば近視眼的な見方に過ぎない」

「では、あなたの考えている有利な形というのは何だね」

堀が尋ねると、山本は胸を張って言った。

「つまり兵力の量や質で張り合ってもダメだということだよ。相手はこちらに数倍する大国だ。とても問題にならない。だから向こうが対応できない次元で勝負するしかない。具体的に言えば、我が国の保有する南洋諸島だ。マーシャル、カロリン、マリアナに点在する島々は絶好の飛行基地になる。この島々を航空要塞化して、必要なだけの大型爆撃機を配備す

れば、米国がいかに大艦隊を建造しても、充分対抗出来る」

山本は一気に述べ立てた。

たしかに陸上の基地は攻撃破壊されても、占領されない限りは修復されるし、損耗した航空隊は後方基地から補充出来る。これに反して空母や戦艦は、大型爆弾の数発で戦闘不能になり場合によっては沈んでしまう。

「なるほど、いかにアメリカでも艦隊は建造出来ても、不沈空母の陸上基地は、絶対に造れないということか」

「まさにそうだ。そうなれば莫大な経費のかかる戦艦や空母は必要ない。補給路を守るための巡洋艦や駆逐艦があれば充分だ。あとは敵のシーレーンを攻撃する潜水艦隊を整備すればいいだろう。いうなれば我が国の経済力に相応した軍備でこと足りるというわけだよ」

「うーむ、それはあなたの発案かね」

「いや、井上成美が言い出したんだが、俺も同じ考えている」

「しかし、その計画に対応するような長距離爆撃機は、まだ完成していない」

堀が指摘すると山本はうなずいた。

「その通りだ。戦闘機や水上機は向こうに追いつき、一部はすでに追いこしている。しかし四発の大型爆撃機、例えば空の要塞と称するボーイングB 17に匹敵するものは、まだ設計もされていない。だから敵艦隊の上に、一トン、二トンの爆

弾の雨を降らせる重爆撃機の大編隊が実現するのは、まだまだ先の話だ」

「とうとうと、いつ頃だと見込んでいる」

「そうだな。俺はおよそ十年ほどかかると見ている。しかしこの戦備が完成したならば、米国は我が国に手出しが出来なくなるんだ。つまり戦争抑止力として、充分に機能すると考えているよ」

山本の説明には、説得力があった。

「だからそれまでは、戦争してはいけないわけだ」

「その通り、だがいまとなれば、何とか早期終結の道を見つけて出すしかあるまい」

山本は力をこめて言い切った。

何とも残念なことだと堀は思った。国家存亡の危機に直面して、現在の海軍首脳部には、山本以外に傑出した人物がいな

ない。日露戦争当時は、海軍大臣は山本権兵衛、軍令部長が伊東<sup>いとう</sup>祐亨<sup>すけゆき</sup>だった。山本海相は、帝国海軍の生みの親といわれるだけあって、絶大な権限と統率力を發揮して、戦争を勝利に導いている。

それにひきかえ、現在の永野修身軍令部総長や嶋田繁太郎<sup>しまだしげたろう</sup>海相は、格段に見劣りがする。さきほど山本が問題は人だと言ったが、せめて現在、永野と同期で自分と同じ頃に予備役

へ追いやられた左近司政三<sup>さこんじせいざう</sup>さんが軍令部総長、また自分より一期上の寺島健さんが海軍大臣であったならばという想いが強かった。

さらに言えば、実戦部隊の各艦隊司令官クラスにも、不適任と思われる人物が幾人か見受けられる。

盟友の山本五十六が、精魂を傾けて伸るか反るか大勝負に出ようという時に、それを支える部将たちが決して適材適所とは言い難い。果たしてこれでもいいのか……。堀の内心では危惧の念が尽きなかった。

「失礼致します」

襖の外から声があつて、当家の若女将が顔を見せた。

「お話が尽きないようですが、いかがが致しましょうか。地方さ<sup>じかた</sup>んや立方<sup>たちかた</sup>のお姐さんは、もう帰しましうか」

「いま何時だね」

「そろそろ十時になります」

「そうか、どうだ堀、話し合ひはこれくらいにしようか」

「ああ、いいだろう」

では皆を呼んでくれ、今夜は賑やかにやろうということになり、待ち受けていた芸者衆が次々として入ってきた。

地方は長唄の三味線弾きで、端唄<sup>はうた</sup>、俗曲<sup>ぞくきょく</sup>と何でもこなすヴェテランである。

立方は梅龍を入れて三人、中年増の方はたしか花柳流で、梅龍と若手の妓が尾上流だという。

遅いのでまずお座敷をつけさせて頂きますということ、次の間との境の襖が取り払われ、踊りが始まった。

中年増と梅龍がまず、小唄振りの「空ほの暗き」を踊り、その次に若手を加えた三人で、定番の「六段くずし」が披露される。

フリは三人ともぴたりと揃っているが、それぞれに持ち味があり、ことに梅龍はもうかなり出来上がっているらしく、ややくだけた仕種がなまめかしい。

踊りが終わり、梅龍と若手が山本の側に、中年増のお姐さんは堀の脇にはべり盃のやりとりが始まったが、地方のお姐さんは緋毛氈の上に坐ったままで声をかけた。

「ねえ社長さん、久しぶりで長唄を一曲お願いします」

堀は酒はまったく呑めないが、邦楽は好きで、若い頃から長唄や小唄に親しんでいた。師匠について本格的に稽古を始めたのは、社長になってからだが、このお姐さんも時々弾いて貰ったことがあった。

「ああ、何か唄おうかな」

腰を上げた堀が、地方さんの脇に歩みよると、緋毛氈の見たの上には、すでに長唄の唄い本が置かれていた。

『「松の緑」はいかがですか、梅龍さんが踊れますよ』

勧められるままに、堀は「松の緑」を唄うことになった。

「社長さんは低い方でしたね。六本ぐらいですか」

「いや、最近は少し上がった。八本でいいよ」

三味線の音締めねじりの打ち合わせをしていると、梅龍が前に坐り、よろしくお願いしますと両手をついた。

はい、よろしくと三味をかまえたお姐さんが受け、梅龍は舞扇を手に次の間の中央に立つ。

「よう。待ってましたア」

山本が声を上げ、やがて「松の緑」の前弾きが始まった。

この曲は長唄の習い始めに稽古したことがあるが、吉原の廓くわらくの模様を描写した、なかなか風雅な作品である。

かなり長い前弾きが終わり「今年より千度迎うる春はる」こと

……と唄が始まった。軽やかに舞い続ける梅龍の姿が、視界の端にあった。

中ほどの「松の位くらいの外八文字」というあたりは、今を盛

りの花魁おいらんの華やかさと風格が必要だと教えられていたので、堀は力をこめて唄い上げ、梅龍の方も着飾った花魁道中の太夫の足さばきを、あでやかに表現していた。

曲が終わると、やんやの喝采かさいだった。

「大当たりイ。唄も踊りも上出来だ」

山本は手放して褒め上げていた。

席へ戻ると、梅龍が傍らに坐った。

「どうも有難うございました」

「ああ、なかなかいい踊りだった。蜀山人の詠んだ『全盛の君ありてこそこの里は、花もよし原 月もよし原』という狂歌を想い出したよ」

「まあ嬉しい。でも堀さんのお唄がお上手なので、本当に気持ちよく踊れました」

彼女の言葉は、まんざらお世辞だけではない様子だった。

堀が注いでやると、ぐい呑みで二杯、鮮やかに呑み干してから、彼女は少し改まった口調で言った。

「ねえ、ちよっとお尋ねしていいですか」

「うむ、何だね」

「この頃、新聞が太平洋波高しとか、日米間の風雲急とか書いてるけど、本当に戦争が起きるんでしょうか」

梅龍の問いかけは、随分と真剣なものだった。

「うーむ、君はどう思うかね」

「私ですか。私は絶対に起きないでほしいと願っています」

堀は梅龍の顔を直視した。じっと見返す彼女の眸には、ひどく思いつめたものが浮かんでいる。

「その通りだ。何としても戦争は避けるべきだよ。だがなあ、世の中には、どうにもならない時勢の成行きというものがあ  
る」

梅龍は無言のまま、堀の顔を見つめていた。やがてその両

眼がうるみ、ほろりと涙がこぼれ落ちた。とたんに彼女は顔をそらして笑い出した。

「まあ、私としたことが、随分野暮なことを口にして……。

ごめんなさい」

そう言いながら艶つぼく盃をさし出す仕種には、もういまほどの鬚は見られなかった。

「よーし。いまからは俺が皿回しをやって見せる。梅龍はこっちへ来い」

軍衣の上着を脱ぎ、白い長袖のシャツの腕をまくり上げた山本が立ち上がった。

皿回しは山本の得意芸である。さっそく細い三尺ほどの竹の棒と、大小の平皿が用意された。

「お姐さん、『かっぱれ』を弾いてくれ」

言いながら山本は、右手に持った竹竿の先に皿を載せた。

□かっぱれ、かっぱれ。ヨーイとな。

山本は渋い声で唄いながら、ゆらりゆらりと竿を上げ下げしながら、皿を回している。

□沖の暗いのに白帆が見える。あれは紀の国みかん船……

曲は続き、皿は落ちそうで落ちない。

□豊年じゃ万作じゃ、明日は旦那の稲刈りじゃ……。

いつしか一同は、声を揃えて唄い始めた。

□ねんねのお守りはどこ行つた。あの山越えて里越えて、寝

ろてばよお、寝ろってば寝ないのか、この子はよ……

「山本閣下は、とても楽しそうですね」

いつの間にか堀の脇に、若女将が坐っていた。

「ああ、あいつはほとんど呑まなくせに、座持ちがうまいよ」

「随分、ご苦労なされているようですけど、少しはお氣が晴れたらと思いますよ」

まだ若いのに女将は、ひとかどの苦勞人のような喋り方だった。

皿回しが終わり、山本たちは「金比羅船々」を始めている。

銚子の台座を伏せて、交互にその上においたり持ち上げたりする座敷遊びである。

□金比羅船々、追お手に帆ほかけてシユラシユ〜。回れば四国さんしゅうは讃州なな、中なかの郡ごおり、象頭山ぞうずさん、金比羅大権現……

地方さんの弾き唄いだが、曲は次第にテンポが早くなる。

ワツと声が上がリ、握る手と伸ばす手を間違つた方が罰盃を呑まされる。

「山本と梅龍は相変わらななんだな」

堀は女将の盃に注いでやりながら尋ねた。

「ええ、もう六、七年でしょうか。花街でも珍しい、ほんとの相惚あいぼれね」

「まつたくだなあ」

これまでの二人のいきさつを知り抜いている堀が、思わず声にするほど、眼前の二人は仲むつまじく見えた。

「梅龍には、旦那がいるそうだな」

「ええ、名古屋のお大尽です。かなりのご年輩で、時々お見えになりますよ」

「山本のことも知っているわけだ」

「もちろん、ご承知です。でも何もおっしゃいませんよ」

「よく出来た人だな」

「そうなんです。あんなお方は滅多めったにおいでになりません」

堀は正面の賑やかさを眺めながら、さきほどの梅龍の涙を思い浮かべた。

開戦までに残された時間は、せいぜいあと一ヶ月だろう。

現在、連合艦隊の司令部は、旗艦長門におかれている。当初は作戦全般を統括するため内地にいるだろうが、その中に前線へ出動して、東奔西走の日々が続くだろう。そしてやがては、永別の日が訪れるかも知れない。だがこれは、ひとり山本だけではない。帝国海軍々人のすべてに課せられた宿命だった。

「風かぜ、蕭々しょうしやうとして易水寒えきすいさむし……か」

堀は低くつぶやいた。

「え、何とおっしゃいました」

「女将は、司馬遷の『史記』を読んだことがあるかい」

「いえ、ありませんけど」

「秦の始皇帝を暗殺しようとして、俠士の荊軻が出発する時、国境の易水の畔で別れの宴が開かれた。見送りの人々は、髪の手を逆立て、一斉に足を踏み鳴らして唄ったそうだ。『風、蕭々として易水寒し、壮士ひとたび去って、また還らず』とね」

女将は、堀の顔と山本たちの賑やかさを見較べながら言った。

「では、これが送別のお席なんですか」

「いや、それはわからない。だがもし戦争になれば、あいつは目出たく凱旋するか、白木の箱で戻るか、そのどちらかなんだ」

「じゃ、社長さんは」

「私かね、私は兵器製造業の代表取締役だが、いざとなれば、予備役でも召集されるかも知れない」

「それで、どんなお仕事をなさいますの」

「そうだな。せいぜい輸送船団の指揮官あたりかな。しかし私が戦場に出るようになっては、帝国海軍もお仕舞いだよ」

話し合っている間に、向かい側の罰盃の遊びが終わった。

「おい堀。俺は今夜ここに泊まるが、お前は どうする」

山本が声をかけた。

「いや私は帰るよ。家内の具合があまり良くないのでね」

「そうか残念だな。これから花札を始めるんだが」

二人のやりとりを聞いた女将が、ではお車の手配をしますと立ち去った。

ややあって、お供が参りましたと連絡があり、堀は腰を上げた。山本と梅龍、中年増の三人は、座布団を真中にして花ガルタに熱中している。

「それじゃ、元気でな」

部屋を出ようとすると、山本は玄関まで送ろうと立ち上がり、廊下へ出た。仰々しいから、よしてくれと堀が押しとどめると、

「じゃここで別れよう。千代子さんの身体が心配だな。くれぐれも大事にしろよ」

そう言って山本は足を留めた。

堀の自宅は、世田谷区上馬二丁目である。

タクシーに揺られながら、堀は今夜の会合を思い返している。昔の家を出る時は小降りだった雨が、次第に激しくなっている。

今日の山本には、かなりつきつめたものが感じられた。

避戦の望みは叶わず、矛を取って立ち上がらざるを得なくなった時、何かよほど思い切った方策を選んだのではないだろうか……。表面には出していないが、どこか開き直ったよ

うな凄味すごみが漂っていた。

梅龍が感じ取ったのは、彼の並々ならぬ決意だったのかも知れない。

さまざまな能力に恵まれながら、山本には極めて純粋な部分があった。

海軍士官と芸者衆の交情は、ごくありふれた情景に過ぎない。だが彼と梅龍の間柄は世にも稀な相思相愛の仲だった。しかも彼は一方では、何不足のない家庭を営んでいる。並はずれた熱情と一途さがなくては、とても続けられるものではない。あるまい……。

山本をGF長官に据えたのは、間違いだつたのではないかと堀は思った。

彼には放胆ほうたんな賭博師とばくしの一面がある。その彼が土壇場どたんばで、一か八かの賭けに出た時、果たしてそれを理解し支援するものがあるのだろうか。破天荒はてんこうな構想だけが先走りして、誰もついていけないということになりはしないか。

やはりあの男の居場所は、軍政であり海軍大臣の職務だ。GF長官など実戦部隊の指揮官は、他にいくつも替わりがある。しかし適当な時期に戦争終結の舵取りの出来るのは、海軍には山本しかいない。

あいつは絶対に第一線で死なせてはならない。出来る限り早く内地に呼び戻し、終戦工作に取りかからせるべきだ。

その根回しをどうやったらいいか……。堀は海軍の長老たちを想い浮かべていた。首相の経験者となれば、岡田啓介よないちみまさ、米内光政よないちみまさなどの名前が浮かぶ。また山梨さんや左近司、寺島さんなども力になってくれるだろう……。とはいえ、海軍大臣の嶋田は、伏見宮さんの大のお気に入りだ。軍令部総長を退いても、あの方の将官人事への発言力は大きい。山本の海相就任には、周到な準備が不可欠だ……。

フロントガラスのワイパーが、降り注ぐ雨をふり払って、左右に動き続けるのを見つめながら、堀悌吉はひたすら考え続けていた。

## 〈8〉

連合艦隊司令部は、十一月六日から十一日までの六日間、東京に滞在した。

十一月七日には軍令部総長から、奉勅命令ほうちよくの大海令第一号が発令され、大海指の第一号も伝達された。それは共に山本司令長官に、開戦に備えての作戦準備を命ずるものだった。これに伴ってGF司令部からは、連合艦隊作戦命令第一号や、第一開戦配備が発令されている。

十一月八日は、午前十時から陸軍大学校で、連合艦隊と陸



軍の南方軍の作戦協議が行われた。

連合艦隊司令部と第二艦隊司令部の幕僚は、陸軍の南方総軍（艦下）麾下の各方面軍の幕僚と顔を合わせ、南方攻略作戦のさまざまな問題について、具体的な打ち合わせを交わしたのである。

協議は翌九日も続けられ、十一月十日には陸海両軍の作戦協定が成立し、その調印がなされた。

陸軍側からは寺内寿一南方総軍司令官が、海軍からは山本連合艦隊司令長官と近藤第一艦隊長官が出席し、杉山参謀総長と永野軍令部総長の立ち合いのもとに、調印の行事が終了したのである。

中央での要務を終えたG F司令部は、十一月十一日横須賀海軍航空基地から輸送機で帰途についたが、書類や同乗者が増加したため、急いで九六式陸上攻撃機を一機準備して、同行させることになった。

横須賀基地を離陸したのが午前十時四十分、曇天で気流の具合はあまり良くなかった。しかし遠州灘を過ぎるあたりから次第に天候が回復し、紀伊半島を横切った頃にはすっきり晴れ上がって、快適な飛行日和に変わっていた。

G F参謀長の宇垣纏（まき）は、輸送機の座席から下界へ目をやりながら想いに耽っていた。

開戦へ向けての準備は着々と進んでいる。

六日間の在京中に、予定の要務は順調に処理された。慌しい日程の合間に、自宅へも顔を出したが、昨年内家を亡くしたあとの留守宅では、二人の息子が元気で過ごしている。まずは後顧の憂いはない。

また別離の意をこめて訪れた海軍省や軍令部の職員たちの顔面には、緊張と共に活気が溢れていた。世紀の大業を目前にした海軍中央部の意気込みがそのまま顕われていて、大変頼もしく感じられた。

すでに開戦は十二月八日と決定され、もはや秒読みの段階だった。

明後日の十三日には、岩国の海軍航空隊で連合艦隊の作戦打ち合わせが予定されている。それが終わり次第、各艦隊はそれぞれ定められた部署へ向けて出発することになっていた。まさに矢は切って放たれようとしている。作戦全般に何か手落ちがないかと思ひ巡らすと、気がかりな点が幾つかあった。

シンガポール方面は、英海軍が大幅な増強に踏み切った様子だった。詳細はまだ不明だが、戦艦二隻と空母一隻が本国から派遣される可能性が高い。

敵戦艦の艦種にもよるが、もし新鋭のキング・ジョージ五世クラスなら、南方部隊の金剛、榛名の二隻では対抗出来ない。といった、連合艦隊旗艦の長門や陸奥は、作戦全般の統

括のため内地から動かせない。

万が一、英艦隊の活動を阻止出来なければ、マレー半島の  
上陸作戦が瓦解してしまふ。だからそれなりの手を打つては  
あるが、まだ充分とは言えないのが現状だった。

もうひとつの大きな問題は、やはり真珠湾攻撃だ、何しろ  
開戦襲頭の大遠征計画で、この正否が今後の戦局に及ぼす影  
響は、はかり知れないものがある。

かりに事前に察知され、相手が手ぐすねひいて待ちかまえ  
る中へ飛びこむことになれば大変なことになる。

我が航空部隊が、オアフ島上空に到達した時、真珠湾は全  
艦艇出港して、も抜けの空<sup>から</sup>かも知れない。上空には敵の戦闘  
機が待ち受けて猛攻撃を加えてくるだろう。一方、敵空母部  
隊は全力を挙げて、我が空母部隊を攻撃してくる。また出撃  
した敵の大艦隊は、我が機動部隊を包圍殲滅しよう<sup>と</sup>かか  
るに違いない。何しろ向こうは、こちらの所在や行動を知り尽  
くしているのに対し、当方はほとんど手探りの状態だから始  
末が悪い。

下手をすれば、とんだ修羅場<sup>しゆらば</sup>に陥つてしまふ。

そのため開戦と同時に、山本司令長官の直率する主力部隊  
は、瀬戸内の柱島泊地から出撃することになっている。

長門、陸奥以下の戦艦六隻、小型空母の鳳翔、軽巡二隻、  
駆逐艦十一隻の艦隊は、小笠原列島の線まで進出して、万一

の場合に、血路を開いて脱出してくる空母機動部隊の救出に  
当たることになっていた。

よもやそんな事態は起きないだろうが、とにかく、このハ  
ワイ攻撃作戦が決定したことで、連合艦隊の作戦計画は、大  
きく変化している。

自分が軍令部の第一部長（作戦）を務めていた昭和十四、  
五年の頃は、仮想敵国は米国一國で、南洋群島の線で米太平  
洋艦隊の来攻を待ち受けて艦隊決戦を行うという、従来通り  
の邀撃戦法<sup>ようげき</sup>一本槍だったのである。

それが現状では、フィリピンやマレーやジャワへ攻略の  
ための大軍を派遣し、しかも一方では、敵の本拠のハワイ・  
オアフ島へまで攻撃の手を伸ばしている。まさに世界三大海  
軍国の二國を相手にして、国運を賭けての戦争を始めようと  
しているのだった。

何はともあれ、死にもぐるいで戦い抜き、この国難を乗  
り切るしかない……、宇垣は覚悟を新たにしていた。

「参謀長、下を見てください。陸軍の輸送船団ですよ」

航空参謀の三和中佐が近づいてきて告げた。  
輸送機はすでに広島湾にさしかかっていて、眼下の宇品沖  
には、その数が百隻を超えろと思われる輸送船の大群が集結  
していた。

それぞれが陸軍の将兵や武器、弾薬を満載して、南方へ向

けて出港するのだろう。その攻略作戦の前途は、我が連合艦隊が、米国、英国、さらにオランダ、オーストラリアなどの海上兵力や航空戦力をいかに撃滅するかにかかっている。

もし作戦の手違いで、敵の大規模な反撃を許すとなれば、無防備な輸送船団はひとたまりもない。あたら精銳の陸軍部隊が、海の藻屑となってしまう。

まあ、まかせてほしいと、ここ数日の陸軍との作戦協定で何度もくり返してきたが、少なくとも開戦当初の南方攻略作戦に関しては、連合艦隊は、絶対の自信を表明していた。

問題はやはりシンガポールだった。

英国の東方艦隊をいかに封殺するかについて、まだ確信はなかった。いまのところG F司令部は、艦艇の増派ではなく、航空兵力の増強で解決しようとしている。

基地に展開する第一航空部隊へ、一式陸上攻撃機三〇機を、新たに派遣する予定になっていた。陸上攻撃機一〇〇機で、爆撃と雷撃の協同攻撃を行えば、戦艦二隻を撃沈破出来るといのが山本長官の考えだった。

しかし高速で行動中の、しかも対空兵器を充分装備した新銳の戦艦を、航空攻撃だけで沈められるのだろうか。少なくともこれまでにそんな前例はない。この対決にどんな決着がつくのか、未知数というしかなかった。

しかも相手は空母一隻を伴う可能性が高い。艦隊上空に直

衛の戦闘機がいたら、こちらでも戦闘機が必要になる。

第一航空部隊所属の戦闘機は、九六式艦戦が十二機、零式艦戦が二七機だが、さらに小型空母の龍驤を、比島部隊から馬來部隊へ移して補強するつもりだった。

打つだけの手は打った。しかし戦争には予想外の展開がつきものだ。錯誤がくり返され、それがより少ない方が勝利するとされている。果たしてどのような不測の事態が生ずるのだろうか。またいかにしてそれを克服出来るのか。すべては、これから始まる国家の命運と数多くの人命を賭けた、壮大なドラマの幕が開いて見なければわからない。

心配はない、なるようになる。必ず天佑神助があるはずだ……と、宇垣は自分自身に向かって言い聞かせていた。

十一月十三日、山口県岩国の岩国航空隊本部で、連合艦隊最後の作戦打ち合わせが行われた。

各艦隊司令長官、参謀長、首席参謀、さらに各戦隊の司令官や先任参謀など約四十人が参集したが、南遣艦隊の小沢治三郎長官とその幕僚は、すでに海南島の三亜へ向けて出撃していて欠席だった。

午前十時、本部の大講堂に一同が着席し、正面の壇上から山本司令長官が、一場の訓示を行った。

帝国は自存自衛のため、ついに米、英、蘭三国と戦わざる

を得ない状況に立ち至った。かくなる上は、我々は一身を投げ打って君国の防衛に当たらねばならない。全軍の将兵はすべて本日より本職と生死を共にして貰いたい……。

山本の言葉は、そのまま場内の戦士たちの胸に染み渡った。決して大声でもなく激しい口調でもないが、淡々と述べるその言葉には、一種名状し難い凄愴せきそうの気が溢れている。一同は肅然と聞き入っていた。

長官の訓示が終わると、宇垣は参謀長の立場から、幾つかの注意事項を伝えた。

ことに第一機動部隊に対しては、真珠湾攻撃は奇襲を旨としているが、決して無警告の騙だまし討ちではない。国際法に定められた最後通告は、外務省を通じて攻撃開始三十分前に米政府へ手交されることになっている。だから攻撃開始は、予定時刻よりも前にならぬようくれぐれも留意してほしい……。

宇垣がそのように告げると、機動部隊の各員は深くうなずいていた。だがそれに引き続き、もしも日米交渉が成立し戦争が回避された場合には、たとえ攻撃隊が発艦したあとでも、進撃を中止してほしいと言うと、さすがに場内がざわめいた。

そりや無理ですという幾人かの声があがり、やがて草鹿参謀長と囁き合った南雲長官が立ち上がり、発進した攻撃隊に引き返せと命ずる場合、艦攻や艦爆は無線交信が可能だが艦

戦は困難で、現実的にはとても無理だと思おうと発言した。

南雲の言葉に続いて、場内の雰囲気や和らげようと思っただのか、誰かが「出かけた小便を止めようとするようなものですよ」と言ったので軽い笑い声があがった。

その時、すつくと椅子から立ち上がった山本が言った。

「百年兵を養うのは何のためだと思っているのか。もしこの命令を実行出来ないという司令官があるなら、この場で出勤を禁止する。即刻、辞表を提出せよ」

山本の言葉は厳然と響き渡った。場内は水を打ったように静まり返り、誰一人として言葉を返すものはなかった。

宇垣の説明はそれから後も続き、終了後は昼食となり、武運の長久を祈つてのスルメや勝栗も配膳に上っていた。

午後一時、雨の降りしきる本部玄関先のホールで、参列者一同の記念撮影が行われた。

午後二時からは、各部署ごとの打ち合わせが開始され、すべてが終わったのは、午後六時過ぎだった。

そのあとは、岩国の料亭「深川」で、慰労の宴会が催された。

大広間の床の間を背にした上座には、山本長官を中央に宇垣と黒島参謀が坐り、その両側には、各艦隊の長官、参謀長、幕僚たちが、ずらりと居並ぶのでの宴席が始まった。

宇垣が簡略に挨拶して乾杯が行われると、土地の芸者衆の

唄や踊りが披露され、やがて室内は賑やかな懇談の席に変わって行った。

山本長官の前には、次々と献酬にやってくる者が絶えない。

山本は盃を受けても口をつけずに、脇の杯洗に捨てるのだが、どの相手にもこやかな表情で、わけ隔てなく応対していた。

そのうちに十一航艦の大西参謀長が現われ、山本と少し話してから、宇垣の前にとっかと坐りこんだ。

「なあ宇垣、今日は大変ご苦労だったが、もうそろそろお役ご免というところだろう。二航戦の山口もいるから、別室でクラス会をやるうじやないか」

空母蒼龍と飛龍を指揮する第二航空戦隊司令官の山口多聞少将は、同じ四十期のクラスメートだった。

「よかろう。それでは手配をするから、もう少し待っていてくれ」

「じゃ、山口に伝えておくよ」

大西が去ると、宇垣は仲居さんと呼んで別席の準備を頼んだ。

「承知しました。十五分ほどお待ち頂けませんか」

仲居さんはそう言うつてから、芸者衆をつけますかと尋ねた。

「いや、いらぬ。酒と肴があればそれでいい」

やがて用意が出来ましたと連絡があった。

宇垣は山本に、大西や山口と別間で飲んでいますと断わって、一段と賑やかになった大広間をあとにした。

別室は、奥まった二階の八畳間だった。

床柱も天井も古びてはいるが、がっしりした造りである。

部屋の中央に黒檀の座卓が置かれ、その周囲に座布団が三枚敷かれている。

座卓の上には、大ぶりの銚子が五本と、ぐい呑みを七、八个並べた盆が置かれていた。

まだ誰も来ていない。宇垣は座卓の前に坐りこんだ。窓の外は真暗で何も見えないが、かすかにせせらぎの音が聞えた。

やがて、どかどかと足音が響き、ガラリと襖を開けて大西と山口が入って来た。

「おお、酒は充分あるようだな」

大西が言う。

「ああ、肴もやがてくるはずだ。だが芸者は頼んでないぞ」  
宇垣の言葉を山口が引きとった。

「いや、あんな田舎芸者はいない方がいい。酒がまずくなるよ」

辛辣な言葉だが、山口の口から出ると何とも明るくて毒気がない。やや垂れ気味の双方の目尻に愛敬があり、ふつくとまことに穏やかな顔立ちの山口多聞は、兵学校四十期と海

大二十四期を共に二位で卒業している。航空戦術にかけては、海軍部内で随一の定評があり、いずれ将来はG F長官と期待されている存在だった。

「しかし何だな。今日の昼、山本さんが命令に従わぬ指揮官は、即刻辞表を出せといったが、あれは大した迫力だったな」  
さっそく手酌で盃を傾けながら、大西が口を切った。

「たしかにあの気魄はさすがだ。長官の姿が一段と大きく見えたよ」

山口も続ける。

「あそこは当然、俺がたしなめるべきところだ。だがあのひととで、随分助かったよ」

宇垣の言葉を、二人はその通りだと受けとめていた。

「そういえば、お前のところの飛龍と蒼龍を、ハワイ攻撃からはずすという話が出たことがあったな」

大西が山口に尋ねた。

「そうだよ。十月の初め頃だった。艦の航続距離の一番長い、加賀と瑞鶴、翔鶴の三隻だけで、部隊を編成したらどうだと軍令部が言い出した。しかもヴェテランの搭乗員は全部そっちへ移せというんだ」

「それでお前は、南雲さんのところへ怒鳴り込んだのか」

「ああ、いまさら搭乗員たちを手放せるものか。蒼龍、飛龍は絶対に攻撃部隊に参加する。もし燃料切れになつたら、太

平洋を漂流してもかまわんと食い下がったよ」

「それで、その案は立ち消えか」

「まあ、そういうことだな」

穏やかでゆったりした風格とは裏腹に、山口司令官は訓練の厳しさと果敢な指揮で、部内切つての猛将と評価されていた。

「ところで、またむし返すようだが、このハワイ攻撃は、うまく行くと思うか」

しばらくの間、それぞれが黙って呑み続けていたが、やがて宇垣がそう切り出した。

「俺はむつかしいと思うな。理由はやはり指揮官だ。もし強襲になり乱戦となった時には、南雲さんじゃとても手に負えないだろう」

大西が受けて言う。

「じゃ、もし完璧な奇襲が実現したとする。その場合はどうだ」

「ああ、そうなりや、型通りの攻撃だけで、さっさと引き揚げるだろうよ。つまり南方攻略の終了までの間、米太平洋艦隊を封止するというのがタテマエだからな」

大西は、ことも無げに答えた。宇垣は今度は、いかにもうまそうに呑み続けている山口多聞に尋ねた。

「なあ山口、もしお前が南雲長官の立場だったら、どうする

つもりだ」

山口は微笑を浮かべながら言った。

「典型的な奇襲となる可能性は、決して低くない。その訳はな、相手が我が方の意図を察知していないからだ。だから戦略的な意味での奇襲は、すでに成立しているよ」

山口はゆったりした口調で続けた。

「それでどうなるんだ」

「問題は、真珠湾に米艦隊がどれほどいるかということだ。もし艦隊の大部分が在泊中なら、まさに赤子の手をひねるようなものだ。敵の艦隊も基地航空部隊も、たちまち壊滅状態になる」

その時大西が尋ねた。

「例の浅沈度の改造魚雷は、ようやく完成したそうだな」

「うむ、長崎の三菱兵器製作所で、試作の十本が完成したのが十月の末だ。さつそく発射テストをしたところ、三本中の二本が成功した。現在、百本分の製作に昼夜兼行でとり組んでいるところだ」

「開戦までに間に合うのか」

「なんとかなるだろう」

答える山口は、相変わらず落ちついた態度を崩していない。「要するにお前の観測では、敵は充分な哨戒や索敵を行っていないということだな」

宇垣が問いかけた。

「まあそうだ。理論的にあり得ても、現状、日本海軍には、そんな能力も計画もないと思っているはずだ」

「すると攻撃は大成成功ということになるが、少し話がうますぎないか」

宇垣が言うと、大西も口をさし挟んだ。

「例えば、開戦に備えた訓練で、ほとんどが出港中という場合もある。また前線基地へ飛行機を運ぶため、空母が出はらっているケースもあるだろう」

「当然あり得る。形勢はまさに千変万化だ。実が虚になり、虚が実になるわけだよ」

盃を手にした山口は、いささかも動じていない。

「つまり何だな。いかなる状況に遭遇しようとも、その場で最も適切な対応が求められるということだ」

宇垣が言うと、山口は大きくうなずいた。

「とは言うものの、言は易く行は難しだ。果たして南雲さんにそれが出来るかどうかだな」

大西が言って、さらにつけ加えた。

「まあ、そのあたりは草鹿や源田が何とか補佐するだろうよ」  
宇垣は、お前も適宜アドバイス出来ないのかと山口に尋ねた。

「俺は空母を二隻直率している。この二航戦に単独行動をと

れというなら、存分にやってみせるが、いまは南雲司令部の指揮下にあつて、その指令に従わざるを得ないよ」

「たしかにそうだが、本当は南雲さんよりは、あなたにハワイ攻撃の指揮をとってほしかったなあ」

大西が言うと宇垣も賛同した。

「開戦があと三、四年先ならということだが、いまさら言つても始まらない」

宇垣はそれから敵の空母部隊について質問した。

「こちらは今年の四月から、空母の集中配備が始まった。現在は正規空母六隻がすべて、第一航空艦隊に集中している。

これによつて艦載機集団の戦力は格段に向上した。米国はまだこの方式を採用していないようだな」

「そうだ、まだ気づいていない。またその集中がもたらす強大な破壊力も知らないだろう。しかしこれはすぐに真似されてしまう。だからその前に、向こうの空母を潰してしまいたいんだ」

山口が答えた。

「じゃ、このハワイ攻撃の目標は、あくまで敵の空母だな」

「もちろんだよ」

「米太平洋艦隊の空母は三隻だ。これを沈めてしまえば、残りは大西洋艦隊の二隻だけになる」

宇垣が言うと大西も同調した。

「そうなんだ。大西洋にいるのは、ヨークタウンとホーネツトだが、これも引きずり出して沈めてしまえば、当分の間はこわいものなしだよ」

かなり酒が廻ってきたらしく、大西はまことに威勢がいい。彼はさらに言葉を継いだ。

「米国の両洋艦隊計画の新型空母が完成就役するのは、二年以上先のことだ。また小型空母なら比較的簡単に揃えられるが、艦載機の集中運用が極めて難しい。そうなると太平洋全域の制海権はこちらのものだ。敵サンは手も足も出なくなるんだ」

大西は意気盛んだった。

「その通りだ。問題は敵の空母戦力なんだ。これさえ倒してしまえば、戦艦や重巡など問題じゃない。行く手を阻むものは何もない。太平洋ばかりかインド洋も、我が機動部隊の独り舞台だよ」

別に気負った様子はなく、山口が言い切った。

宇垣は、航空戦術の第一人者である山口と大西の自信に満ちた言葉に聞き入っていた。

これは決して大言壮語ではあるまい。二人とも彼我の戦力を充分計算した上での発言に違いないだろう。

これまでは戦艦や補助艦艇の対米、英、六割の比率は、大きな足枷むかだった。六割では勝てない。せめて七割ほしいとい



うのが、我が海軍の悲願だった。だがその戦力比率はそのままで、航空兵力が加わったことで、状況は大きく変わろうとしていた。

正規空母の数は、米国が五隻、こちらが六隻で一隻多い。また英国が東洋に派遣出来る正規空母は、せいぜい三隻でしかも性能はかなり低いという。だから太平洋とインド洋で双方を個別に撃破してしまえば、充分勝算があるというのが、この二人の言い分だった。

「しかし変われば変わるものだな」

宇垣が言った。

「大砲や水雷で構成された戦力比率が、すでに通用しない時代になったのか」

「糲うだよ、今では飛行機の数と性能、さらに搭乗員の技や運用方法が、決定的なポイントなんだ」

山口が解説した。

「だがこれまで洋上では、航空攻撃だけで沈められた戦艦はないぞ」

宇垣が言い張ったが、山口と大西は問題にしていない。

「それは間もなく証明されるよ」

「あとしばらくの辛抱だな」

二人は顔を見合わせて笑っていた。

「いまの話だと、もう戦争は勝ったようなものじゃないか」

宇垣が反論すると、山口が言った。

「少なくとも二年間、太平洋とインド洋の制海権が確保されるならばだ。英本国と分断されたインドでは、独立運動の火の手が燃え上がるだろう。またハワイに残存する米国艦隊も、米本土からの補給がままならぬとなれば乾上がってしまう。つまり米国々内でいかに膨大な量の武器、弾薬を生産しても、前線へ輸送出来ないわけだ。そうなれば米国内の世論が承知しないだろう」

宇垣は我ながらくどいな、少し酔ったようだと思いつつさらに尋ねた。

「まあな、そのように推移する可能性はあるだろう。しかし現状では、それは希望的観測に過ぎまい」

かなり呑んでいるが、まったく表に出していない山口が、平静な口調で言った。

「もちろん戦いくさというものは、どんな不測の事態が発生しても、おかしくはない。だから全然違う想定もあり得る」

彼はそう言うと、一気に盃を呑み干して口を開いた。

「もしも米軍が、我が方の空母兵力の動向に疑念を持ったとしよう。当然、主要な軍港に潜水艦を派遣して、監視するはずだ」

山口はそれから少し考えて、言葉を続けた。

「機動部隊の各空母は、それぞれが目立たないように個別に

母港を出て、千島の択捉島に集合することになっている。ハワイに向けて艦隊が単冠湾を出撃するのは、十一月二十六日の予定だ。この艦隊行動が湾外で監視している米軍潜水艦から、逐一通報されたらどうなると思う。もちろんまだハワイ攻撃の企図はわからない。しかしこれだけの大部隊が、東へ向けて進撃するのは唯ごとじじゃない。行先はハワイか米本土と見るのが当然だろう。潜水艦のリレーで監視が続き、十二月四日のC地点で南下が始まるから、目的はハワイだと判明する。そうなれば敵は気づかぬふりをして、万全の邀撃態勢をとるに違いない」

山口は淡々と説明を続けた。

「うーむ、そうなれば、まさに飛んで灯に入る夏の虫だな」  
宇垣が言うと、今度は大西が引きとった。

「十二月八日の夜明け前、オアフ島の真北二五〇哩に到達した我が機動部隊は、第一次攻撃隊一八〇機を発進させる。第二次攻撃隊一七〇機の発進はその一時間後だ。ところが第一次攻撃隊が、真珠湾上空に殺到した時には、湾内はもぬけの殻で、艦艇の姿はなし。飛行場にもまったく機影はない。しかも上空からは、敵の戦闘機群が一斉に攻撃をかけてくる。一方我が艦隊は、陸上と空母から飛び立った敵の航空部隊の集中攻撃にさらされることになる。もちろんハワイ北方海域は、米太平洋艦隊の大部隊で、完全に包囲されているという

わけだよ」

大西は滔々と熱弁をふるっていた。

「なるほど、それが南雲長官がうなされている悪夢だな」

宇垣は言いながら、山口へ視線を向けた。

「それでどうなんだ。いまの想定が実現する確率は」

宇垣の声がやや高まっても、山口は落ちついたものである。

「心配するな。向こうはこっちの空母の動きに疑念など持つてはいないよ」

山口は大西と顔を見合わしてから言った。

「昨年の九月、零式艦戦が大陸へ進出して、一方的な勝利を収めた。重慶、成都の敵戦闘機隊を徹底的に撃破して、しかも我が方の損害はゼロだった。その有様を重慶に派遣されている米軍の将校が、本国へ報告しているんだが、向こうではほとんど話題にもなっていない。つまり情報がまったく信用されていないんだ」

「そんなことは、あり得ないということか」

「そうだ。米軍は我々の、ことに航空戦力をひどく過少評価している。また空母の集中配備の効果についても、認識が及んでいない。だから、これから発生するハワイの航空攻撃は、向こうにとつては想像を絶した事態ということになるんだ」

「うーむ、言うなれば、戦術の大変革だな」

「そう言ってもいい。やり方によっては、この攻撃で米国太

平洋艦隊を全滅させ、真珠湾軍港を覆滅ふうくめつさせることも出来るんだからな」

「本当にそこまでやれるのか」

「ああ、指揮官がそれにふさわしい人物なら、充分に可能だ」

山口は断定した。

「昨年の六月、ドイツは電撃でんげき作戦でもってフランスを降伏させた。第一次大戦では、四年間かかって決着のつかなかったのに、わずか六週間で片がついてしまった」

まるで講義でもするように山口は語っている。

「戦車隊の通行が不可能といわれたアルデンヌの森を突破した、ドイツの戦車軍団は、たちまち英仏軍主力の背後に廻りこんでしまった。抵抗するものがない市街地や田園地帯の舗装道路を、時速五〇キロ以上で快進撃を続けたそうだ。燃料の補給が間に合わないので、通りすがりのガソリン・スタンドで戦車に給油したという話だが、まったく思いもよらない展開で、北方にいた英仏の大軍が包囲されて降伏している。この独軍の勝利はまず第一に、戦車兵力を集中的に運用したからだとされているが、戦法の革新が劇的な効果をもたらしたことは間違いないだろう」

山口の講義はようやく終わった。

「つまるるところ、我が軍の空母の集中配備は、画期的な意義をもっているということだな」

宇垣が言う。

「当然そうなる。ドイツの場合は、予想外なアルデンヌの突破が、効果的だったわけだ。だから革新的な戦法は、まず奇襲の形で実現されるべきだよ」

山口はそのように結論づけた。

「しかし、ドイツの電撃作戦のような成功が果たして再現されるだろうか」

「それはやって見なければわからない。海戦は陸戦よりも、不確実な要因が多いからな」

山口は微笑を浮かべながら答えている。

たしかにそうだと宇垣は思った。日露戦争でも随分きわどい場面があった。

明治三十七年八月の黄海こうかいかいせん々戦では、あやうく旅順りよじゅん艦隊をとり逃がすところだった。旅順港外へ出撃してきた敵艦隊と交戦し、その退路を絶とうとしたところ、相手は反対に外洋へ向かって、高速で突っ走ってしまった。慌てて追いかけたが距離は縮まらず、あやうくウラジオストクへ遁にがすところだった。

その時、我が方の放った一発が、敵の旗艦チエザレウイチの司令塔を直撃し、司令官と幕僚は即死、その二分後にさらに一弾が今度は艦橋に命中し、艦長は人事不省となり舵手だしゅが取舵とむの形で舵輪にもたれて死亡した。そのため敵艦は大き

く方向を変えて逆走し、他の艦もあとに続いたので、何とか旅順港へ追いこむことが出来たのだった。

さらには三十八年五月の日本海海戦の直前、予定の期日になっても敵のバルチック艦隊が姿を見せないのので、業を煮やしたGF司令官は、津軽海峡への転進を発令しようとしていた。

それを島村速雄第二戦隊司令官たちが何とか思い留まらせたので、あの対馬沖の勝利が成立したのである。また海戦当日の天気晴朗なれども波高しという気象条件も、勝敗を大きく左右している。

そのように考えると、まさに勝敗は時の運だった。賽の目がどう転ぶかは誰にもわからない。だが現状は、準備の面でも訓練の度合いでも、航空戦力重視の点でも、我が方は明らかに優位に立っている。

戦うならば今だ。開戦時期の決定に関しては、決して間違っていないと、宇垣は自分に言い聞かせていた。

「どうだ宇垣、GFの参謀長ともなれば、気苦労が絶えないだろうが、俺は充分やれると思ってるぞ」

まあ呑めと、銚子を手にして大西が勧める。

「うむ、心配し出したら、それこそキリがない。いまとなれば、人事を尽くして天命を待たただけだ」

酒盃を持ち上げ宇垣が言うと、山口も大西も、それぞれが

盃を差し上げて応えていた。

岩国航空隊の来賓用宿舎では、一航艦の南雲忠一長官が、参謀長の草鹿龍之介を自室に呼び寄せた。時刻は午後十時半を過ぎている。

「長官、お呼びですか」

ノックをしてドアを開けると、かなり広い寝室のベッドの傍らに、低い角テーブルと肘つき椅子が二脚置かれていて、あわせ裕の寝巻に着替えた南雲がぼつりと坐っていた。

「どうだ。宴会は終わったか」

「はあ、私が出た時には、広間の片隅にまだ三組ほど残っていました。それで長官、何かご用でも……」

向かい合って腰を下ろして、草鹿が尋ねたが、南雲はウムと言ったきり黙っている。

昼の間はさほど思わなかったが、こうして見ると長官は、五十四歳にしてはかなり老けこんでいた。

いかつい顔立ちが変わっていないが、和服姿の上司の目尻のあたりや両頬には、やはり衰えが感じられる。やがて南雲は低い声で言った。

「今日の山本さんの、攻撃隊帰還命令の件だが、どうしてあれほどこだわるのかな」

やはり気にしているのだと思えば、草鹿は答えた。

「もちろん、実際問題としては無理です。しかしあれは、G  
F長官としての心構えを述べたのだと思います」

「ふーむ、心構えかね」

「そうです。今回の作戦は、前例のない異端の計画です。何  
が起きるかわかりません。ですから、いかなる状況にも対処  
出来る心構えが必要だと言っ趣旨だったと思います」

「なるほど、そういう見方もあるか」

南雲は腕を組んでつぶやいた。

機動部隊の出撃は間近に迫っている。旗艦の赤城は、佐伯  
湾の出港が十一月十八日の午前九時、択捉島の単冠湾に到着  
するのが、二十二日の午前八時と予定されていた。

意気高らかに征途に就くべき艦隊の最高指揮官が、こうし  
て見ると、どうも腰が引けているように感じられる。これぞ  
いいのかと、補佐役の草鹿は気がかりだった。

「ところで例の改造魚雷だが、単冠湾の出撃まで間に合うの  
かね」

この件も、これまでくり返し尋ねられていた。

「何とかなるでしょう。長崎の三菱兵器では、昼夜兼行の突  
貫作業中です。もし遅れるようなら、加賀に工作員を乗りこ  
ませたまま、単冠湾へ行く予定ですが、場合によってはハワ  
イまで連れて行くことになるかも知れません」

草鹿は語気を強めて告げた。

「そうか、そこまでやればなんとかなるだろうな。実はわし  
は魚雷は間に合わないだろうと思っていた。これがなければ  
攻撃計画は不完全なものになる。従ってさすがの山本さんも  
あきらめるんじゃないかと見ていたんだ」

南雲はボツリと本音をのぞかせていた。

「そうでしたか、では長官は今でも、この計画を中止すべ  
きとお考えですか」

草鹿はあえて面と向かって尋ねて見た。

「そうだ。わしはこの計画は邪道だと、今でも思っているよ。  
たしかに航空戦力の発達は目ざましい。しかし、といてつこ  
れまで営々と積み重ねてきた戦法を放棄して、新しい方法に  
転換するのは、やはり大博奕だ。なぜそこまでやらなきゃな  
らんのか。わしには理解出来ん。もうひとつ言いたいのは、  
航空関係者は自信満々でいるが、それは思いつきじゃない  
かということだ。何しろ今度の相手は、重慶政府の寄せ集め  
の飛行隊じゃない。世界第一流の英、米の航空部隊だ。対戦  
して見て初めて双方の実力が明らかに異なる。その時になつて、  
さすがは先進国の底力は違つと、思い知らされるんじゃない  
のかね」

南雲は顔を上げて、ここまで一気に述べた。そして一息つ  
いてから続けた。

「さらに言えば、これは敵の寝込みを襲う不意討ちだからな

場合によつては卑怯のそしりをまぬがれないだろう」

南雲はそう言つて言葉を切つた。

長官の言葉は、いわばタテマエ論だと草鹿は思う。実のところ、千変万化の航空作戦には、まったく自信が持てないというのが本心だが、そこまでは口に出来ないのだろう……。

「いや長官、いろいろとご心労はわかりますが、我が方の空母艦載機に戦力に関しては決して過信ではありません。すでに米英軍のレベルを超えております。また攻撃開始の三十分前には、外務省を通して最後通告を出すことになっています。ですから騙し討ちや卑怯な振る舞いではないと考えます」

草鹿は言い張つた。

「だが、その三十分前というのが問題だよ。相手は正々堂々の通告とは受けとめまい。恐らく、小手先のごまかしと評価されるんじゃないかな」

南雲はあくまで疑問視していた。

「しかしながら国際法上は、それでいいことになっています。また奇襲が成立せず、強襲となる可能性も低くはありません」  
どうしてこの期に及んで、こんなやりとりをするのかと思ひながら、草鹿は語り続けていた。

「まあいい。これで止めよう。これ以上は愚痴になる」

ようやく南雲は討論を打ち切ろうとした。

「長官、十八日の佐伯湾出港の前に、GF長官が見送りにこ

の赤城へ来艦されます。その際にお聞きになったらいかがでしょう」

「何を聞けというのかね」

「ハワイ攻撃の目的です」

「それは連合艦隊作戦命令に明記されているよ。開戦劈頭、米國艦隊を奇襲撃破し、その積極作戦を封止する。また米國艦隊機動する場合は、これを捕捉撃滅するとなつてい

「いえ、それだけなら何とでも解釈出来ます。つまり抜き討ちの一太刀にすべてをかけるか、あるいはどこまでも踏み込んで、目釘の続くまで斬りまくるべきなのか、そのあたりの有り様です」

草鹿の言葉に、南雲は首を振つた。

「そんなことは尋ねても無駄だよ。自分で適宜判断し給へと言われるに決まつている」

「そうでしょうか」

「そうだよ。じゃ参謀長、君は一体どう考えているのかね」  
南雲は逆に聞き返した。

「私ですか。私なら奇襲が必ず成功すると固く信じて、その一撃にすべてを賭けます。風の如く来たり、風の如く去るです。あとにはまったく心を残さず、ただ一撃でもつて去る。その心構えが正しいと考えます」

草鹿は強く言い切つた。

心構えが正しいと考えます」

草鹿は強く言い切った。

「ふーむ、奇襲というのは、本来そういうものだろうな」

「そうです。禅宗の言葉に『獅子翻擲』<sup>ししほんてき</sup>というのがあります。獅子は獲物を襲

うときは、全力を尽くしてかかるが、一たび倒してしまえば、心を留めずに他に移るという意味で、私はこのあたりに、奇襲戦法の本質が示されていると思います」

草鹿の言葉に、南雲は大きくうなずいた。

「たしかに君の言う通りだ。余計なことは考えずに、無心で全力を集中すべきだな」

南雲はそのように結論づけている。だが草鹿から見て、その内心はまだまだ揺れ動いているように感じられた。

〈未完〉

## 第28回日本医学会総会 ソシアルイベントの全容

種目	世話人	
ゴルフ	中村 哲也	板橋中央病院 理事長
ラグビーフットボール	谷田貝茂雄	東京ドクターズラグビーフットボール 主務
硬式テニス	林 茂興	東京都医師テニス協会 会長
卓球	前田 津紀夫	関東医師卓球連盟
ボウリング	吉沢 洋景	全日本医師ボウリング連合 東京都代表
柔道	海老根東雄	全日本医師柔道連盟 会長
剣道	荻原 幸彦	全日本医師剣道連盟
ジョギング	小嵐 正治	日医ジョギーズ 代表理事
囲碁	宮嶋 建昭	東京都医師囲碁連盟 幹事
アマチュア無線	井上 文正	日本医師アマチュア無線連盟 副会長
医家芸術	白矢 勝一	美術部・書道・写真・(俳句)
	萩野 仁志	洋楽部
医学郵趣会	金山 知新	日本医学切手友の会 代表
軽音楽	窪谷 潔	洋楽部

クラブの美術・書道・写真展会場は東京国際フォーラム 4月2日～10日

洋楽部はシラヤアールスペース 4月2日 午後